◉特集《前篇》
♪一杯のコーヒーから夢の花咲くこともある

コーヒーの木と暁の家

ルンアルン（暁）プロジェクト
中野穂積

北タイのチェンライで、コーヒーを育てる中野穂積さんは、山地民の子どもたちが学校に通えるよう麓に寮をつくり、30年にわたり教育支援を続けてきた女性。その中野さんが、従来の活動に加え、コーヒーの種を播き、山に定植し、実を手摘みし、日に干し、焙煎して有機栽培コーヒーを出荷しているという。コーヒー栽培のお話とそこにいたるまでの道のりをご寄稿いただきました。

一粒ずつ手で摘んだ完熟コーヒーの実は、皮をむき水にさらしてぬめりを取り、その後天日で干す。日差しの弱い山間部では10日以上かけて乾燥させる

コーヒーの
花は白い

実は赤く
ほのかに甘い

乾季が明けた雨の後 白い花をつけ 雨季が明けると赤い実に

今年は5月からよく雨が降り、あたりはすっかり雨季の景色になりました。

暁の家(※1)があるチェンライ県ウィアンパパオ郡は、周りをなだらかな稜線に囲まれた海抜約500メートルの盆地です。

チェンマイとチェンライを結ぶ国道118号線の西側にも東側にも水田が広がり、更に山地民の人々が住む山々がその先に連なっています。

コーヒー畑は暁の家から車で1時間余りのところにあります。国道118号線を更に北上して17キロ、メータム村から西へ山道を辿ります。山の麓のメータム村から約25キロのアカ族の村ドインガームにはスタッフの実家にあります。6月の半ばにスタッフの実家で寝泊りしながら、さらに5キロほど山の細道を辿ったところにあるコーヒー畑に通い、スタッフ、研修生総出で、施肥作業をしました。

私は半日足らずの参加でしたが、重い肥料を籠に入れたまま草に滑ってバランスを崩し転んで泥だらけになりました。

1年を通したコーヒーの作業の中でも施肥作業は最も重労働です。特に有機肥料は化学肥料と違い、ずっしりと重く、また量もたっぷり施さなくてはなりません。慣れない者には立っていることさえ難しい急斜面でクワを振るってコーヒーの木の山側へ穴を掘り、肥料を施します。今年の肥料は暁の家の芝、枯れ葉に牛フンと市販の有機肥料を重ね、積んでおいた自家製の堆肥です。

雨季に入ってしっかりと水を吸ったコーヒーの木は生き生きと枝葉を広げ、乾季末に葉を落とした姿からは見違えるようになりました。これからしっかり肥料を吸収しながら青い実を育てていきます。青い実が次第に大きくしっかりした形になり、赤く色づいて収穫期を迎えるのは10月末から1月にかけてのことになります。

収穫は真っ赤に熟したものだけを選んで手摘みします。収穫したコーヒーの実はその日の内に皮をむき水に浸けこんで2日後洗浄、更に一晩きれいな水に浸けて天日干しします。麓では1週間以上、日差しの弱い山では10日以上かけて完全に乾かし、保存します。北部タイのアラビカコーヒーは一般的には収穫してから6カ月は寝かせておきます。そのころからコーヒー豆の味が安定して美味しくなるのです。

乾季明けの雨が降った後、通常3月末から4月はじめにかけてでしょうか、コーヒーの花が咲きます。白いきれいな花で、柑橘類の花に似た香りがします。花の時期は短いので、人里離れた山のコーヒー畑の花を見られたなら、幸運と言うべきでしょう。

コーヒーを栽培する理由 山の人々との出会い

日本人の私が、どうしてタイの山でコーヒー栽培と加工までの仕事を始めるようになったかと申しますと、話は山地民の中高生のための生徒寮を始めた動機、さらにはそもそも北部タイに足を運んだきっかけからお話ししなくてはならないでしょうか。

東京での会社員生活に見切りをつけ、当時ランプーン県で農場を開いておられた故谷口巳三郎先生を頼り、熱帯農業研修に参加したのは1985年のことでした。研修は1ヶ月間で、夏休みを利用して参加した男子大学生たちは、皆それぞれの日本の大学へ戻って行きましたが、私は初めてタイを訪れてからの念願だった山地民の人々の生活を知る機会を得たいと考えていました。

研修期間中、チェンマイ県メーリム郡にあるロイヤルプロジェクトのモデル農場を見学に行った折、所長さんから声が掛りました。ここにいて日本へ農業研修に行くスタッフに日本語を教えてくれないかということでした。麓とは全く違う涼しさと、まだ電気がきていない静かな環境にもひかれ、渡りに舟と、二つ返事で引き受けることにしました。

モデル農場はモン族の村ノンホイにあり、派出所でスタッフたちと生活を共にしながら、村の人々の生活を目の当たりにすることができました。日常の生活に不自由しない程度のタイ語を身につけ、山の人々の生活を理解しはじめたのはそのころのことです。

特に村の中にある小学校の前

※1：山岳民族の子どもたちが中学高校に通学するための寮として1995年にスタート。生徒寮としての活動は2015年に終了し、現在は学校外教育で中学、高校の卒業を目指す青少年の職業訓練を実施。

を、親たちと同じように小さな籠を背負い、通り過ぎていく子どもたち、麓の中学校に進学したけれど学費が足りなくなって途中でやめて帰ってきた少年のことが気になりました。派出所の机の上に広げた日本語のテキストのローマ字を上手に読むその少年を見て、機会さえあればこの子たちもしっかり勉強して、自分たちのなりたい職業につけるのだ、と思いました。

「大人たちは難しい、しかし子どもたちには可能性がある」当時世話になっていたスタッフの言葉です。村人のケシ栽培をやめさせても他の換金作物で生計を立てていくことができるよう、農業指導することがプロジェクトの大きな目的でした。

なかなか生き方を変えられない大人たちと悪戦苦闘しながら、子どもたちを対象に花を植えさせたり、協同で豚の飼育をさせたりするスタッフもいました。

私にも何かできないだろうか、と考えるようになりました。

そしてもう一つ大きく心を動かされたのは、村人の家で家族同様に7年間も暮らした元日本兵がいたという事実でした。働き者で真面目なマンさんは、日本へ帰る夢から覚めては泣きながら、その村で亡くなったそうです。

訪ねて行った隣村のモン族の老人に、日本語で声を掛けられ驚いたこともあります。昔中国に住んでいた頃、日本軍キャンプの料理番をしていたとのことでした。あなた、どうぞ。鶏肉、豚肉と、覚えている日本語を披露してくれるのを聞きながら、老人が日本軍のためにつらい思いをしなかったのかどうか、次にはどんな話をきかされるのかと不安を覚えずにはいられませんでした。

当時のタイ社会には、私が日本人であると分ると、昔日本軍のためにどんな苦労をしたかを早口に言いつのる人、あるいは軍事侵略の後は経済侵略かと議論を吹っ掛ける人も少なからずいたからです。私自身にも日本はアジアの国々で多大な迷惑をかけてきたという負い目が強かったかもしれません。

私の不安をよそに、老人は私がその場を立ち去るまで、ずっと親切に接してくれました。日本軍に対してのいろいろな思いはあっても、一人で来た日本人の若い女性には無関係であると思い、懐かしく昔を思う気持ちだけを表してくれたのかもしれません。

モン族の村だけではなく、ラフ族、リス族の村でも人々は、私が日本から来たと知ると、「遠くからよく来てくれた」と歓迎してくれました。私は日本人として、この山の人々に返さなくてはならない借りがあると思うようになりました。

茅葺の竹の小屋でリス生徒寮の寮母に

それから日本へ帰った後、お世話になった谷口先生から一通の手紙を受け取りました。村に中学校がないリス族の子どもたちを中学校へ通わせるための生徒寮を作るために協力しませんかという内容でした。私にできることは資金集めの協力くらいと思いつつ、茅葺の竹の小屋でリス生徒寮をスタートした時には、1年寮母を務めるという約束をしてしまいました。

１９８７年、チェンライ県メースワイ郡の山の麓の村に国道沿いの４ライ（６４００平米）の田んぼを買い、ならした土地に茅葺の竹の小屋を建てました。そして11人のリス族の中学生たちと始めた共同生活は、忘れがたい貴重な体験となりました。電話も車もない生活でも、便利で快適な生活を思い出すことはありませんでした。

人が生きていくために多くの物は必要でないことを知りました。必要なのは支え合う人が傍にいてくれることです。

私は自分よりずっと若く、身体も小さな生徒たちからいつも助けられていました。大人にもひるまず冗談を真顔で言うリス族の子どもたちに、時に戸惑いながらも、また次々に突きつけられる子どもたちを取り巻く厳しい現実と向かい合いつつも、笑い声と歌声の絶えない生活に惹かれていきました。

多くの人々の支援を受けるようになり、茅葺の小屋も煉瓦と木造の２階建ての生徒寮となりました。ウィアンパパオ郡に第２寮暁の家を始めたのは１９９５年です。前の年に地元チェンライの財団の傘下となりました。リス生徒寮も暁の家も生徒が多い時にはそれぞれ47名までになり、リスだけではなく、ア

里で育てたコーヒーの苗を山に託す

暁の家のコーヒー畑の植樹。5000本のコーヒーと果樹を、暁の家の生徒、スタッフ全員、アカ族の村人20人余り、支援者の男性1人とその息子さんの合計63人で植樹。2011年6月25日。暁の家にとって記念すべき日になった

カ、ラフ、モン、ヤオ、カレン族の中高生たちで賑わいました。私も1年の約束が、結局暁の家が生徒寮としての活動を終了する2015年までの28年間を寮母として過ごしてきたことになります。

山の人々が独自の生活文化を守っていくための農業

多くの生徒たちと暮らしながら、そしてその家族たちの生活を見聞きしながら、山に暮らす人々にとって最も良い換金作物は何だろうと思いを巡らすようになりました。

生徒寮では、寮費として年額2000バーツをそれぞれの保護者から支払ってもらっていました。必要経費の1割に満たない寮費を無料にできないことはありませんでしたが、その寮費を支払う行為が、離れて暮らす親子の絆になると信じていました。

雨季に入った6月、コーヒーの木1本ごとに堆肥を施す。クワを振るって木の山側に穴を掘り、たっぷりと有機肥料を入れる施肥作業は重労働

暁の家の敷地に播いたコーヒー。双葉が開いたら1本ずつビニールポットに植え替える

発芽後7〜8カ月。ビニールポットで成長し次々と本葉を開いていく

雨季の間に雨の恩恵と堆肥で育ったコーヒーの実が色づく収穫期は10月〜1月。完熟豆だけを手摘みする。写真は中野穂積さん

発芽後1年3〜4カ月。十分に育った苗を山の畑に定植する。日本の支援者が訪れ補助作業を手伝った

暁の家の生徒たちが「山の生活と文化」というテーマで描いた絵のポストカード。中央の絵は「コーヒーの栽培方法」

けれども無理なく支払える家庭もあれば、時に親戚から借金をしないと払えない家庭もありました。現金がない場合、米や手織の肩掛けカバンで支払ってもらったこともあります。支払えないまま卒業し、職を得てからしばらくして、本人が寮費を送ってきたケースもありました。

日照りや雨にさらされる急な斜面での重労働を続けても、暮らしが厳しい山の人々にとって、もっともよい現金収入への道は何だろうと考えるようになりました。

山に暮らす山地民族の人々は陸稲、トウモロコシなどを栽培しながら山伝いに移動焼畑耕作を続けてきました。以前はケシ栽培で現金収入を得る人々も少なくありませんでしたが、今は法律で固く禁じられ、私も最後にケシ畑を見たのはもう20年以

斜面のトウモロコシ畑。農薬の多用で、畑の傍の川の水は飲まなくなったという話も聞かれる

暁の家。リス生徒寮と合わせると約300人の子どもたちが巣立っていった

写真：ルンアルン（暁）プロジェクト
ムシカシントーン小河修子（P4 コーヒーの花、p８暁の家）

上前のことです。

生徒たちの家族はトマト、キャベツ、ショウガ、トウモロコシなどを栽培して現金収入を得ていました。現在は移動も焼畑も制限され、森林を切り開くことは禁止されています。化学肥料や農薬を多用する農法を、同じ場所で繰り返すことになりました。

化学肥料は使用を繰り返すと土地が劣化するばかりでなく、年々その量を増していかなくては同じ収穫をもたらすことができません。農薬の多用で健康を害す父兄も出てきました。特にトウモロコシ栽培は種、肥料、農薬代を前借りし、収穫時に支払うというやり方が定着していて、水害や気候の変動で、思うような収穫に繋がらなかった場合、借金だけが増えるという事態も起こります。出稼ぎばかりでなく、厳しい山の暮らしに見切りをつけ、賃仕事を見つけやすい麓へ、街の郊外へと、家族で移住する人々も出てきました。

農薬の多用で、畑の傍の川の水は飲まなくなったという話も聞きました。換金作物の耕作地を増やすため、水源近くの森まで切り開こうとする人々も出てきました。

山の人々が山に暮らし、独自の生活文化を守っていくためにも、農業のありかたを再考しなくてはならない現状になってきました。

清々しい味の北タイのコーヒーとの出会い

今から15年ほど前のことでしょうか。ドイチャーンに住む卒業生からコーヒーを貰って飲んだ時のことを思い出します。コーヒーとはこんなに飲みやすい、清々しい後味のものだったのかと心を動かされました。

リス生徒寮を始めた１９８７年、生徒の家族が住むドイチャーン村では、すでにコーヒー栽培が始まっていました。当時はトマト栽培が盛んでしたが、村人はタイ政府の農業試験場の奨励するコーヒーの栽培も始めていたのです。

タイではコーヒーも、インスタントや缶コーヒーなどに利用されるロブスタ種の栽培は、南部で約１００年前から始まっています。フレッシュで飲むのにふさわしい、香り高いアラビカ種が北部で紹介されたのは、50年ほど前のことだそうです。

実際に山間地の村でアラビカコーヒーが栽培されるようになったのは、麻薬撲滅委員会がモデル村として選んだ、モン族の村が最初です。

ケシ栽培をやめても生計を立てていくことができるようにと植えられたコーヒーの木が収穫をもたらすようになった当時は、残念ながら市場がなく、多くの人々がコーヒーの木を切って、ライチの木や野菜などに切り替えてしまったと聞いています。

１９８７年当時、人々はまだ半信半疑でした。フレッシュコーヒーを飲む人はごく限られていました。しかしその十数年後にはタイの経済成長と共にコーヒー文化が花開き、若い人々を中心に、コーヒーを飲む人が増えていくなどということは、当時は想像もできなかったと思います。

コーヒーやお茶なら加工して、山で軽くしてから時期を選んで出荷することができます。

出荷の時期を選ぶことが難しく、しかも輸送にお金がかかるトマトやキャベツなどのように、せっかくの収穫を捨てなければならないこともなくなるでしょう。山の樹木を切り開いた場所でないと育たないトウモロコシやショウガと違い、森の中でも育つことができ、またコーヒーの木自体が山の緑を形成することができるのです。山の人々にとって有効な換金作物であると思えました。

そんな頃、東京のＮＰＯ、ＡＬＬ Life Line Net の皆さんが暁の家に訪ねて来てくださいました。チェンマイ総領事館から紹介を受けたとのことでした。山地民の人々の生活向上のために何かと考えたところ、チェンマイ大学農学部の先生から、コーヒーを勧められたそうです。

「生徒さんの実家で、コーヒーを植えられそうな処はありませんか？」とのことでした。生徒たちに聞いてみると、早速手が上がりました。再び渡りに舟と、このお誘いにも乗らせていただくことになったのです。

来月号に続く

（なかの・ほづみ　ルンアルン（暁）プロジェクト代表　高地民教育と開発財団事務局長理事）